



十小だより

令和 7 年 9 月 1 日
第 5 号
府中市立府中第十小学校

戦後 80 年 生きること、学べることをあらためて考えたい

校長 草刈 あずさ

猛暑、酷暑といわれる暑さの厳しい夏でした。府中市でも、8月5日に気温40度という信じられない記録が報道されました。そして、この暑い夏の間、報道では、戦後80年を取り上げたニュースや番組も多数ありました。また、子どもの自死が過去最高数になったという報道が今年度なされたことをあわせて考えると、「生きる」ことの重さをあらためて考えて、教育活動にあたりたいという気持ちが強まりました。

令和6年に発行された「新 府中市史 近現代 通史編 下」には、戦時下の様子が記されています。

「昭和十九年八月、都区内強制疎開の地域内の学校が、縁故疎開されず残留した児童の集団疎開によって、赤坂区乃木国民学校の児童が府中町へ一五九名、多磨村へ四八名疎開したこと、(中略)多磨村では東郷寺・宝性院・西蔵院に分宿、多磨国民学校の当該学級に入学したこともうかがえる。」

終戦のおよそ1年前、都区内への度重なる空襲を受け、親子で地方等の親戚に身を寄せる縁故疎開が行われ、行先のない家庭は、子どもだけが親と離れて学童疎開が強制的に行われました。都内に残っている母親、戦地に行っている父親の心配をしながら、食料も少ない中で、疎開を強いられた子どもたちの心中を考えると、切なくなります。また、国民学校においても、戦時下の戦争に向かう国民を育成する教育が行われていましたので、子どもたちも学びたくても学べない時代が80年前にはありました。

そして、終戦の年、昭和20年になると、都区内だけでなく、立川や八王子などの近隣の町が空襲にあい、真っ赤に燃えている空を見て恐怖を感じて生活していた様子も書かれています。

「昭和二十年八月四日には、米軍機から宣伝ビラ「伝単」が投下され、そこに『今晚府中町を焼夷弾攻撃することあり』と書かれていたため人々が大騒ぎになった。(中略)なお、府中市域には十一回の空襲があったとされている。」

今でも、世界で戦争が起きています。日本もいつどのようなことが起こるか、これからのことは分かりません。そして、今の子どもたちは、学ぶことや生きることについて、その有難さを実感しにくい環境にあります。たくさんの自由の中で自分の命さえも、自由になるという考えがネット上でも散見されます。

戦後80年の節目の年であること、子どもの自死が過去最高の数値であることを踏まえ、学校でも家庭でも、自他の生命を大切にすること、学べる環境を精一杯生かすことを、子どもたちに教えていきたいものです。